

## きゅうりの施設化誘導

### ■背景とねらい

露地きゅうりの栽培では、通路滞水により生育不良が発生するとともに、降雨により炭疽病等の病害が発生するケースが多い。令和3年は8月等の豪雨で早々に栽培を切り上げるほ場が多かった。そこで、露地栽培から雨よけ栽培へ切り替え、収量を伸ばした事例を収集し、露地栽培者へ施設化推進の啓もうを行った。

### ■本年度の取組と成果

令和4年度にきゅうりの重点巡回対象者になっていただいた飯田市北方のM氏の取り組み事例を調査対象とした。

令和3年度は露地にて栽培され、8月の成り疲れ時期に大雨に遭い、病害発生により9月以降の収量が急激に減少した。

令和4年度に雨よけ施設を導入し、栽培面積及び植え付け株数を減少させたが、収穫量及び単収を大幅に伸ばした。表1参照。

表1 M氏のきゅうり栽培実績

	1年目(露地)	2年目(雨よけ)
品種	おおのぞみ・夏もよう	ニーナ・ニーナZ
面積・定植本数	8a・550株	4a・350株
定植月日	5月15日	5月13日
収穫期間	6月16日～9月2日	6月12日～11月19日
収穫量 (10a当たり)	6.4t (8.0t)	9.9t (24.8t)

この結果を1月19日開催の令和4年度南信州青年農業者活動成果発表会及び2月3日開催の令和4年度南信州きゅうり新規栽培者交換会にて発表し、参加者から好評を得た。

### ■今後の課題と対応

施設化の推進は、収量の増加を期待できる一方で、ネコブセンチュウ類或いはホモプシス根腐病による被害の発生が懸念される。これら連作障害に配慮した栽培を推進する必要がある。

(技術経営係：吉川 昭)

## 夏秋いちご安定生産の推進

### ■背景とねらい

夏秋いちごは県の重点推進品目となっている。温暖な南信州地域では栽培が難しい品目であるが、北部、西部及び南部の標高の高い地域を中心に栽培されている。安定生産のためには、品種に適した栽培管理及び病害虫防除の徹底が求められるため、定期的な巡回により支援を行った。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 J Aと共に定期巡回の実施

5月中旬及び7月中旬に管内の12経営体を巡回し、栽培面積の大半を占める県育成品種「サマーリリカル」の育苗時における注意点、及びアザミウマ類防除方法の確認を行った。

当品種はランナーの発生が遅く、本数が少ない傾向にあるため、次年度の育苗準備が遅れないよう注意喚起を行った。

また、アザミウマ類対策で、ハウス内の抑草シート及びハンモックベンチの下部に対して高圧洗浄機を使って洗浄した結果、例年通りアザミウマ被害の少ない栽培ができた方もいた。

#### 2 「サマーリリカル」における中休み処理効果

高森町のほ場において、7月下旬以降順次中休み処理を行い、令和3年度の収量と比較した。結果、令和3年度に比べ令和4年度は7月の収量は下回ったが、8月及び9月の収量が上回り、秋季の収量平準化の効果が確認され、目的は達成された。ただし、通年収量は下回った。

### ■今後の課題と対応

「サマーリリカル」については、栽培上不明な点が残るので、優良事例を把握し、その栽培技術を普及させたい。また、アザミウマ類の被害は栽培者によって差があり、更なる防除体系の確立が求められる。炭疽病の被害も同様である。

本取組は中山間地農業ルネッサンス推進事業を活用している。

(技術経営係：吉川 昭)

# アスパラガスの生産安定

## ■背景とねらい

アスパラガスについては平成25年～29年の5年間、重点活動で施設化の推進を図った。その後も株養成量調査による次年度収量予測や病害虫防除対策の推進を行い、産地振興を図っている。

また、露地栽培における茎枯病及び雨よけ栽培におけるアザミウマ類の被害は抑止できていない。

## ■本年度の取組と成果

### 1 株養成量調査結果に基づく管理指導

前年度同様に14の定点ほ場について、11月18日から12月8日かけて株養成量調査を行った。全調査地点の平均貯蔵根糖度は令和3年よりは低いが、平年より1%近く高い15.4%であった。ただし、令和4年も10月中旬まで出荷が続いたため、令和5年春の芽数に不安が残る。この結果からは、翌春の収穫については、令和4年度よりは少ないが、平年よりやや多いと予測し、春どりの被覆開始時期や春どりの終了・夏秋どりの立茎開始時期は平年を目安に判断するよう関係技術者に周知した。

### 2 アザミウマ類（ネギアザミウマ）の薬剤感受性調査

野菜花き試験場環境部の協力を得て、6月27日感受性検定の為のサンプル採取を行った。結果、ネオニコチノイド系殺虫剤の感受性が低下していることを把握した。一方でスピノシン系殺虫剤はほ場によって効果に差があった。

### 3 茎枯病に対するベノミル剤の効果

ベノミル剤の抵抗性を野菜花き試験場環境部の協力を得て、株養成量調査と合わせて行い、全ほ場で抵抗性が発達していることを確認した。

## ■今後の課題と対応

アザミウマ類の防除について次年度は県植物防疫協会の農薬展示会として調査を行う予定である。

ベノミル剤はJAの防除例では、防除開始時期に1回のみ使用する体系に変更された。

(技術経営係：吉川 昭)

# 白ネギの7月出荷栽培の検討

## ■背景とねらい

南信州管内において、ネギ類はきゅうりに次ぐ主力品目となっている。しかし、ここ2年程冬場の単価が伸び悩んでおり、品目転換を図る栽培者も出てきている。一方でネギ類は在ほ性が良く、収穫時期の分散が図れるため、従業員等を雇っている法人経営において重要な位置を占めている。

このため、県内では冬季から春季温暖な南信州地域において、高単価が期待できる7月出荷を目指した栽培体系の検討を続けている。

## ■本年度の取組と成果

### 1 耕種概要

- (1) 品種 龍美
- (2) 育苗 播種 2月15日、ペーパーポット CP303、住友林業株式会社ネギ専用培土使用
- (3) 定植 3月18日、高森町吉田 標高470m
- (4) 生育促進 NEWアイホッカ被覆の有無を比較。被覆下に温度データロガーを設置計測。

### 2 生育概況

#### (1) 被覆下気温及び地温



図1 NEW アイホッカ被覆下の温度経過

実際には被覆が仇となり、25℃以上の高温条件の遭遇時間が長くなり、生育抑制となった。

#### (2) 収穫時軟白長

7月17日に収穫調査を行った結果、無被覆区は平均軟白長が26.2cmと出荷規格に近い値になったが、被覆区は18.4cmと規格には程遠い数値だった。

## ■今後の課題と対応

次年度は、2月中旬の定植を試験するとともに、適する品種も確認する。

(技術経営係：吉川 昭)

## スイートコーンの病虫害適期防除の推進（平谷村）

### ■背景とねらい

平谷村では夏季の冷涼な気象条件を活かし、スイートコーンの栽培を推進している。道の駅の直売所へ出荷する生産者組合員を中心に栽培が行われ、近年では、ふるさと納税の返礼品としての人気も高い。平谷村の特産品の1つとして認知されている一方、虫害などの低品質なものの出荷が問題となっていた。そこで支援センターでは、スイートコーンの品質向上のため、品質に大きく関わる病虫害の適期防除を中心に栽培指導を行った。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 栽培指導会の開催

7月5日に生産者組合員を対象に現地指導会を開催し、17名の参加があった。実際にほ場を見ながらの講習および質疑応答は座学よりわかりやすいと参加者から好評であった。

12月に開催された組合員会議において病虫害の適期防除について、次年度へ向けた指導を生産者組合員16名に対して改めて行った。

村全体として作付の面積が縮小傾向の中、出荷量は昨年より約1,000本増加した。



7月に行われた現地指導会の様子

### ■今後の課題と対応

今年度は病虫害に焦点をあてて、指導会を行ったが、違った視点の講習を受けたいとの声もあがった。次年度は肥培管理や排水対策など異なるテーマでの指導会を開催し、更なる品質向上と生産安定に努めていく。

（地域第三係：浅見 菜由子）

## ダリアにおける ICT 機器のお試し導入

### ■背景とねらい

近年、夏秋期の高温の影響を受け、ダリアの栽培でも株落ちや生育停滞といった問題が表面化しており、特に定植1年目の収量低下は経済的ダメージも大きいとされている。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 お試し導入の実施

飯田市内龍江地区と竜丘地区の2戸のダリア生産者ハウスにおいて、長野県がお試し導入で体験を進めている環境モニタリング機器を設置し、およそ3か月間にわたってモニタリングを体験した。観測データは生産者が随時確認するとともに、1か月ごとに取りまとめた各週のデータを生産者と協議して、データの見える化を体験してもらい意見を聞き取った。

生産者からはデータを見える化することが大変好評だった。「知りたいデータがほぼすべて見ることができる。これで栽培環境の好適条件をマニュアル化して後進の育成に活用して産地力を高めたいとの意見が聞かれた。

### ■今後の課題と対応

モニタリング機器はまだ高額であることから好評だった生産者からもすぐに導入することには抵抗が大きいとの声が聞かれるとともに、適正値が判らないので今後はそれを把握していくということで意見の一致を見た。そしてこれを部会役員会に諮ったところほぼ全面的に了承されたので、次年度はデータロガーを活用して適正値の把握に努めて、今後導入を推進するモニタリング機器の有効活用につなげていきたい。

（地域第三係：中村 武郎）

# カーネーションのハダニに対する薬剤抵抗性調査法の検討

## ■背景とねらい

県内有数のカーネーション産地である当地区も2年切り作型の増加と共にハダニの被害が増大する傾向が見られるようになっており、生産者からもその対策を求める声が多く聞かれている。

## ■本年度の取組と成果

### 1 薬剤抵抗性の簡易検定実施

ハダニの発生ピークとなる8月に管内の8生産者からハダニがいるであろうカーネーションの茎葉を提供してもらい、その葉における残存ハダニ類の状況を確認した。そして、次回使用予定の殺ダニ剤を提供いただき、登録に沿った薬液を作成しそこへ前述の葉を浸漬し、浸漬前後の生存ハダニ類の頭数を計測し生産者に情報提供した。

### 2 生産者への情報提供

生産者には生存ハダニ数と共に成虫と幼虫の分布状況をつなげたところ、殺ダニ剤選定時の参考になると好評だった。またある生産者からは実態顕微鏡でハダニの生存状況を見ることが最も実感を得られるとの声が聞かれた。

## ■今後の課題と対応

今年度は報告資料を紙面で情報提供したため生産者にハダニ類生存状況について実感を伴う情報提供ができたかという点、そこは達成できなかったと思われる。そこで次年度は生存頭数の計測時に画像を撮影し、何らかの方法でこれを上映する機会を作ることにより、より実感の伴った殺ダニ剤の効果確認ができるよう支援していきたい。

(地域第三係：中村 武郎)

# 一等米比率の向上

## ■背景とねらい

管内の一等米比率は77%と低く、格落ちの主な原因は、斑点米カメムシ類による被害と心白・腹白、胴割れ等による高温障害、過剰分けつ等による未熟粒の発生である。斑点米カメムシ類の効率的な防除としては、各地で農業用ドローンによる集団防除への取り組みが進んでいることから、高温耐性品種「にじのきらめき」による高温障害の回避と「風さやか」の過剰分けつ抑制による未熟粒発生防止への取り組みを重点的に行った。

## ■本年度の取組と成果

### 1 「にじのきらめき」の栽培試験

飯田市、松川町、阿南町に高温耐性品種「にじのきらめき」の栽培展示ほを3か所設置し、施肥量や栽植密度を検討したところ、施肥試験における玄米収量は、松川町の窒素成分14%増肥区(83.0 kg/a)が、増肥効果は飯田市の窒素成分25%増肥区(145%)が最大となった。栽植密度試験における玄米収量は、標準の坪当り60株移植区が最大で、移植株数が少なくなるほど減収し、坪当り37株移植区では標準比89%となった。白未熟粒の発生は1%未満と少なく、食味値の平均は72ポイントと良食味であった。

### 2 「風さやか」の過剰分けつ抑制試験

適切な中干し期間を把握することを目的に、従来の中干し期間を延長し、田面に亀裂が入るまで、6月25日から7月15日までの20日間中干しを実施したところ、未熟粒の発生は30%少なく、食味値が1ポイント向上した。

## ■今後の課題と対応

「にじのきらめき」については、次年度も同様のほ場で栽培試験を継続し、当地域での適応性を検討する。「風さやか」の中干し期間延長試験については下條村に試験ほ場を設置し、さらなる検証を行う。

(技術経営係：木下 雅仁)

## 水田への野菜導入時の排水対策

### ■背景とねらい

水田へキュウリ及びアスパラガス等を導入する場合、耕盤破碎が未実施であると通路に滞水し、根部が酸素欠乏になったり、作土層不足により生育不良となるほ場が散見される。

長野県の水田は耕盤を形成するため、直径20～30cm程の石を平らに並べ、その周辺に粘土質の土壌を配置し、水持ちの良い水田を作成している。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 カットブレイカー処理による排水性向上の検証

##### (1) カットブレイカー処理

令和4年3月に、飯田市山本、阿智村伍和、下條村親田の3ほ場にて、JAみなみ信州が主催し、全農長野が実演した。

##### (2) 土壌透水性及び断面調査

カットブレイカー処理の前に支援センターではJAの委託を受け、キュウリ栽培ほ場で処理を行うに適切なほ場であるか、6ほ場について透水性と断面調査を行った。結果、3ほ場では大きな石の存在が確認されたため、処理不適と判断し、残り3ほ場を処理適と判断した。

##### (3) 生育経過観察

JA及び全農長野と共に定植後、毎月1回処理ほ場を巡回し、地下水位の計測及び地上部の生育を観察した。また園主から「今年は収穫用の台車を押すのが楽だ」という感想を頂いた。

### ■今後の課題と対応

#### 1 カットブレイカー処理の課題

カットドレン程ではないが、カットブレイカーも大きな石を地表面に持ち上げてしまうため、石の処理が必要である。持ち上げた石が20～30cmと大きい場合、ほ場外へ持ち出す労力が多大となるため、ストーンクラッシャーの実演を求める意見を頂いた。対応する予定である。

(技術経営係：吉川 昭)

## 水稲優良種子の生産（高森町）

### ■背景とねらい

高森町では、JA採種部会による水稲の種子生産が行われており、「コシヒカリ」、「風さやか」、「天竜乙女」、「モリモリモチ」の4品種が採種されている。特に県オリジナル品種である「風さやか」の種子については、県内産地への供給量の約3割を占めており、本県の「風さやか」の生産振興において重要な役割を担っている。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 ほ場巡回の実施

JA担当者と連携し、5月に育苗施設、6月に採種ほ及びその周辺ほ場の巡回を行い、生育状況及びイネばか苗病の発生の有無を確認した。7月には（一社）長野県原種センター及び農業技術課と連携して現地指導会を実施した。イネばか苗病の発生が採種ほ周辺で確認されたが、種子消毒の徹底等によって、採種ほでの発生は確認されなかった。

#### 2 ほ場審査及び生産物審査の実施

品種ごとに出穂期及び糊熟期において、ほ場審査を実施した。異品種混入等を理由に一部ほ場が倒伏のため不合格となったが、45筆(849a)が合格となった。また、「風さやか」において、他地域での病害発生に伴い種籾の不足が懸念されたため、食用種子から種籾へ転用(6,800kg)を行った。

また、収穫後に乾燥、選別された種子について、生産物審査(発芽試験)を実施した。その結果、ほ場審査を合格した種子について、審査基準(発芽率90%以上)を満たし、全量合格となった。

### ■今後の課題と対応

「長野県主要農産物及び伝統野菜等の種子に関する条例」に関連して、JA採種部会において「種子場産地強化計画」の検討を行った。内容を踏まえて、今後の県内産水稲の安定生産のため、採種農家及び関係機関と連携して優良種子生産の支援を行う。

(地域第一係：西川 侑宏)

## 大豆・そばの安定生産

### ■背景とねらい

管内では大豆46haが作付けされ、県育成大粒系品種「つぶほまれ」については、地元食品加工会社との契約取引により13haで生産されている。

また、そばについては90haが作付けされ、そば店との直接取引等による生産により、地域特産品として生産されるとともに、耕作放棄地解消に向けた有望な作物として位置づけられている。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 大豆

8月3日に飯田市で、8月8日に阿智村で生産者立会いのもと、現地巡回指導を行った。

本年は適期播種により生育は順調であったが、現地巡回指導時の莢伸長期から子実肥大期に当たる9月にかけて、降雨が連続し日照時間も少なかったため軟弱徒長になり倒伏が発生するとともに、子実が充実せず、極端に実入りが悪くなった。また、雑草防除が十分に行えず収量の低下を招くとともに、収穫時の汚粒が多くなり出荷不能となるほ場も見られた。病害では連作により一部でダイズシストセンチュウによる生育不良や茎疫病による立ち枯れ症状が見られた。

#### 2 そば

7月11日に高森町でそば栽培者11名を対象に講習会を開催した。水田転作により初めてそばを生産する団体もいたことから、排水対策について重点的に説明を行った。

本年は、開花期に降雨が連続したため訪花昆虫が少なく受粉できない花が多かったことから、平均単収は49kg/10aと少なくなった。

### ■今後の課題と対応

湿害や干ばつ対策を行うとともに、適期播種、病虫害防除等の基本技術の励行により、収量・品質を確保する。

(技術経営係：木下 雅仁)

## 茶の品質向上に向けた取組

### ■背景とねらい

管内の茶は長年、担い手不足と高齢化により適期作業が困難となり、品質低下を招いている。

そこで、講習会を通じ適期作業や防除時期を周知し基本技術の徹底を図った。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 講習会の開催

4月中旬に適期摘採講習会、6月上旬に夏季管理講習会、3月上中旬の春整枝講習会を飯田市、阿南町、下條村、天龍村、泰阜村の12会場にて開催した。



天龍村にて適期摘採講習会の様子

#### 2 チャ炭疽病の防除時期の把握

飯田市南信濃、阿南町川田にて、摘採後の夏季整枝後に、萌芽期～開葉1枚期、開葉2～3枚期、開葉4枚期以降の生育ステージ別に薬剤を散布し発病芽率を調査したところ、生育ステージの違いによる発病の差は認められなかった。しかし、無散布区に比べ散布区は発病芽率を半分程度に抑えられたことにより、防除の重要性を茶振興協議会の総会や講習会等で啓発した。

### ■今後の課題と対応

品質よりも量を確保すればいいといった考えの農家が多いため、求められる品質に見合った生産量の確保ができておらず、引き続き適期作業を周知し、品質向上に向け支援する。

本取り組みは、中山間地域農業ルネッサンス推進事業を活用している。

(地域第二係：堀 琴音)

## きのこ栽培における異物混入防止対策

### ■背景とねらい

食品への異物混入は取引停止や商品回収の費用等、経営はもとより産地の信頼性等、きのこ生産全般に大きく影響しかねない。異物混入防止対策の推進は長野県きのこ振興基本方針における最重点課題となっている。そこで、JAと連携して異物混入防止対策に取り組んだ。

### ■本年度の取組と成果

異物混入を防ぐには、異物混入リスクを取り除くことが重要となるため、以下の調査を実施した。

#### 1 キノコバエの発生調査に基づく混入対策

飯田市及び下條村の計3か所のブナシメジ農家に黄色粘着板を設置し、4月から12月末までキノコバエの発生消長を調査した。今年度は、11月上旬のみ多く捕殺されたが、例年と比較して発生自体は少ない傾向にあった。発生状況と混入対策に関する情報はJAを通じて管内の農家へ周知し、混入防止につなげた。

#### 2 歩行性害虫の侵入防止対策

昨年度、きのこの栽培施設内に侵入する歩行性害虫の実態を把握するため、ドーム型粘着トラップを活用し、捕獲調査を行った。その調査結果を基に施設の確認を行い、侵入経路を絞り込み、隙間のコーキング等の対策を講じた。

今年度は、対策の効果を検証するために捕獲調査を継続して行ったところ、捕獲数は昨年度より減少し、一定の効果を確認できた。

### ■今後の課題と対応

キノコバエは、異物混入という観点だけでなく、培養基を食害するためロスビンにつながる。ロスビンはきのこ経営の損失となってしまうため、継続して調査を実施し、侵入防止を図っていく。

歩行性害虫については、農家自身が継続して調査を行うことで、リスク管理能力の向上につながるよう支援を行っていく。

(地域第三係：坂口 冬樹)

## きのこの安定生産と経営改善

### ■背景とねらい

きのこ経営は、販売価格が長期低迷する一方で、培地及び包装資材の高騰や電気料金の値上げによるコストが上昇しており、非常に厳しい環境が続いている。そこで、支援センターでは、経営改善に向けて以下の取組を行った。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 ブナシメジを生産する法人の経営改善

管内の1法人に対し、JA（営農と金融）と連携し、生産販売や損益等の実績数値に基づき隔月で経営検討会を実施した。その中で、劣化したキャップを更新したところ、害菌によるロスビンが大幅に減少した。

#### 2 トヨタ式カイゼン手法の導入

経営上のムダの徹底的排除による原価低減を目的に、管内の2法人が「ホワイトボードを活用したスケジュール管理」や「動画撮影による収穫作業の標準化」に取り組んだ。

#### 3 後継者の育成

JA主催の「きのこ青年部経営研修会」において、「ブナシメジ、エノキタケの歴史及び栽培基礎」「原価計算について」「トヨタ式カイゼン手法について」の3点をテーマに講義を行った。



きのこ青年部経営研修会

### ■今後の課題と対応

きのこ経営は、昨今の情勢を受け非常に厳しい状態であり、経営改善が急務となっている。そこで、きのこ経営改善推進事業を活用し、県域支援チームによる経営体質強化について支援していく。

(地域第三係：坂口 冬樹)

## 家畜飼養管理技術の向上

### ■背景とねらい

近年、酪農経営においては牛の大型化・産乳能力向上が著しいが、同時に飼養技術も高度化・精密化しており、データに基づく適切な飼養管理が不可欠である。そこで、関係機関と連携して牛群ドックを実施することにより、牛群の現状把握と課題解決の提案を行った。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 牛群ドック

今年度実施実績は8戸であり、以下の項目を関係機関と連携して調査した。

- (1) 栄養状態把握と飼料給与実態の聞取りに基づく給与診断と飼料設計検討：支援センター
- (2) 血液検査に基づく健康状態判定と繁殖成績の診断：飯田家畜保健衛生所
- (3) 農家への実施勧誘、各種助言：酪農協  
検討会においては、上記の結果に基づき暑熱対策等の牛舎内環境、自給飼料生産、糞尿処理等に係る問題点も検討し、総合的な生産性向上・経営改善に取り組んでいる。

#### 2 本年度課題となった事項

輸入乾牧草等購入飼料の高騰が続いていることから良質飼料の確保が困難となり、給与飼料の栄養価不足とそれに伴う乳量・乳質の低下、繁殖成績が悪化する牧場が増えている。酪農家個人の経営努力による改善が難しい状況である。

#### 3 活動の成果

牛群ドックの実施により乳量増加・乳質改善、繁殖成績向上、コスト低減等につながった事例もあり、牛群ドックを定期的な健康診断ととらえ毎年行う酪農家もある。

### ■今後の課題と対応

次年度以降も継続して実施予定であり、本年度実施農家については経過観察するとともに、未受診の農家へも実施を勧める。

(地域第二係：清水伸也)

## ソルガム新品種現地適応性検討

### ■背景とねらい

管内繁殖和牛農家にとって、ソルガムは自給飼料作物の中でも重要な位置を占めている。そこで、畜産試験場等の公共育成機関が育種した新品種の現地適応性を検討し管内での普及に資する。

### ■本年度の取組と成果

#### 1 展示ほの設置：喬木村繁殖農家

- (1) 供試品種 信州大学育成 「F60/04SK2-11」  
(以下「F60」)  
畜産試験場育成 「東山交38号」  
慣行品種 「風立」

「F60」及び「東山交38号」は高消化性であるbmr遺伝子を持つ。

- (2) 調査項目 播種 5月30日、播種量 2kg/10a  
生育(草丈、稈径)、1mあたり本数、収量(原物、乾物)、飼料成分・栄養価(分析：畜産試験場)、牛による選択性
- (3) 調査結果

本年は台風による倒伏等もなく生育は概ね良好であった。草丈、乾物収量では「F60」がそれぞれ3.1m、10.7t/10aと供試3品種の中では最も優れていた。「東山交38号」は紫斑点病の発生が見られた。牛による選択性は「東山交38号」が優れていたが、栄養価(TDN)は「東山交38号」、「F60」が64%と同程度で、風立の47%を上回った。詳細は調査研究課題の項に記載した。

#### 3 活動の成果

供試した3品種の中では生育・収量とも「F60」が優れていた。「F60」は上記展示ほ以外にも管内9か所で試験栽培を行ったが、農家からは生育、牛の嗜好性等好評であった。

### ■今後の課題と対応

購入飼料の高騰が続く中において自給飼料の増産は喫緊の課題であり、次年度も継続して優良品種の現地適応性の調査と普及に取り組む。

(地域第二係：清水伸也)

# 家畜防疫対策の強化

## ■背景とねらい

管内においては令和元年の豚熱以来家畜伝染病の発生は見られないが、全国では豚熱、あるいは高病原性鳥インフルエンザの発生が相次いでおり、依然感染リスクが高い状況にある。そこで関係機関と連携し防疫に係る体制強化、意識向上を図った。

## ■本年度の取組と成果

### 1 南信州地域特定家畜伝染病防疫研修

南信州地域振興局各課を含む県機関、市町村、JA等関係機関から約40名が参加し、一連の初動防疫体制や緊急連絡網の整備について確認した。

(1) 開催 令和4年10月20日（木）

(2) 演習内容

ア メール伝達訓練、結果報告

オクレンジャー、メールを用いた。

イ 机上演習

(ア) 伝達訓練の結果報告

(イ) 連絡会議による動員・資材確保の訓練

ウ 仮想農場での行動シミュレーション

エ 実地演習（防護服の着脱）

オ 総合討議

### 2 特定家畜伝染病防疫措置時の埋設地確保支援

管内13の養豚場、15の養鶏場を対象に、防疫措置時の埋却予定地をチェックし、未整備な農場に対しては家畜保健衛生所、農地整備課とともに現地調査を行って周辺環境の整備や農場からの搬出・移動経路等について検討し改善を指導した。

## ■今後の課題と対応

所内における防疫に対する認識の共有を図るとともに、市町村、関係機関に対しては継続して初動防疫の体制整備を進め、農家には飼養衛生管理基準の遵守徹底を家畜保健衛生所と連携して指導していく。

（地域第二係：清水伸也）